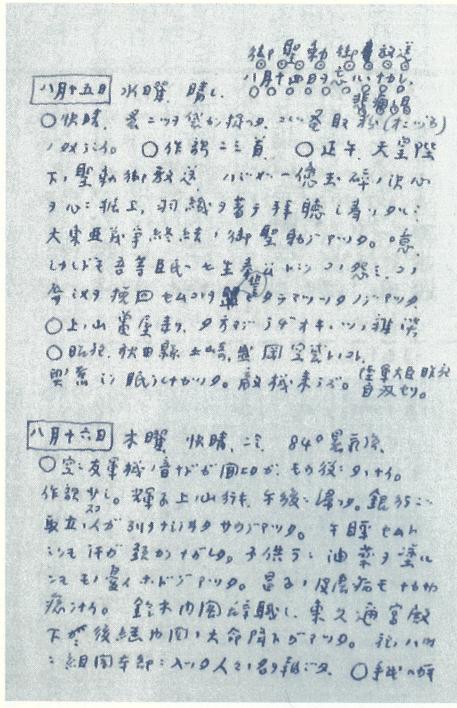
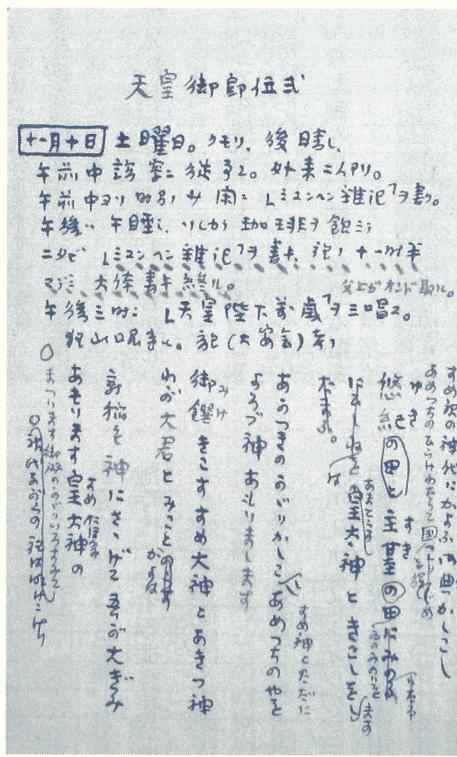


# Vol.24 2021.12.15 茂吉記念館だより



斎藤茂吉日記(上から昭和3年11月10日 同20年8月15・16日)

目次	寄稿／篠 弘 欧州を詠む『寒雲』	2-3	定例歌会概要・新型コロナウイルス対策	10
	寄稿／佐伯 裕子『赤光』の気になるところ	4-5	収蔵資料から—斎藤茂吉の日記帳—	11
	寄稿／御供 平信 藤の花ぶさと畠	6-7	短信(掲示板)・友の会入会 / 活動支援募金のご案内	12
	館長随筆 気軽に口遊みたい茂吉の歌	8-9		

# 欧洲を詠む『寒雲』

篠

弘

茂吉記念館だより 24 号

茂吉の第十二歌集『寒雲』（昭和十五年三月）は昭和十二年から十四年までの作品で、中国における戦場を素材にしたもののが激増する。しかしその中に、カタカナ語（特にドイツ語によるヨーロッパの人名・地名など）を詠み込む歌が増えてくる。このことは『欧洲』を詠む斎藤茂吉で概観したことがあるが、その代表作を例証して、茂吉の戦時下における反骨精神の発現に目を留めておきたい。

リュクルゴスの回帰讃ふるゝにもなり得ず吾は

子にむかひ居り

『寒雲』

この「リュクルゴス」は前九世紀のスパルタの伝説的な立法者。軍国主義的市民生活、鎖国主義的制度を規定した人物。日中戦争以来スパルタ教育が蔓延してきたが、自分の子らを巻き添えにしたくないと、国策に反発する。

ヴエネチアに吾の見たりし聖き眉おもふも悲しい

まの現に

留学中に訪れたスクロベニア礼拝堂、十四世紀にジョシトの描いたフレスコ画に着材する。キリストに縋ろうとするマグダレナの清らかな聖画を思い出す純真な心も

ち。  
海の彼岸より通信あり砲身に鋤られて無くなりし  
メンデルスゾーン ライプチヒ来信  
その父がユダヤの名門家系であつたため、ライプツィヒ

にあつた作曲家の銅像が撤去される。ナチスの過剰なユダヤ人排斥運動が、偉人にまで及ぶことを慨嘆する。

ハリウッドのくちびる紅きをとめ等が映りて吾のいゝ  
ろ恥しも

すでに日中戦争が始まるが、敵視するアメリカからの情報が伝わっていたことが知られる。ハリウッドの女優の紅い唇に心を奪われるあたりが、いかにも茂吉らしい。

妻いだく時のあひだはわれ知らず homo alalus の  
群りを見よ

この「アルラス」は、ことばを持たないの意。化石人類（原人）は、ことばを知らない。「ピテカントロップスアルラス」から来た造語で、言語障害の人間。戦争が深まるにつれて、まさに妻を抱く時のように無言の人が急増したことを嘆いたもので、発言が自由でなくなつた時代に対する批評眼が潜む。

スペイ等はわれに來らず Volapük 空想してゐて時  
の移れば

この「ボラピューク」はエスペラント語に先駆けて、一八七九年にドイツのシュライヤーが提唱した、いわば国際人工語。英語が多用されていたこともあって、しかもナチスに弾圧されて衰退するが、茂吉は国際共通語を志向したボラピュークの考え方に関心をもつていたのである。そうした不穏な不埒な自分のところに、密

偵が捜りにこなかつたと述懐する。ひそかにこれは言語統制を憂える問題作で、あえて抽象的な表現を使つて、真意を隠蔽したと思われる。国内においても、その当時からエス・ペランチストの活動が内閣の情報部から目をつけられていた。

集中には、渡欧中に訪れたアルプス地方「チロル」の歌がある。これは渡欧隨筆の「鹿の床」の記述と符合する。

チロールをわが行きしどき雪山の寒施業見つつ谷  
をくだりき

隨筆のほうでは、同行した女性の会話として語られている。

〔戦（注：第一次世界大戦）〕まゝには奥太利もなかなか豊かだつたんでせう。それで大雪が降ると山の獸が食べ物に困るものですから、日を極めて餌をまいてやるん

歌集  
**寒雲**  
斎藤茂吉

『寒雲』（昭和 15 年 古今書院）



オーストリア・ウィーン ゲーテ像前の茂吉（大正 11 年）

です。さうすると山ちゆうの獣が寄つて来て、そりや見物なんです。お猿も来れば、鹿も羚羊も猪も熊も来るといふ調子でね」と記述される。こうした土俗的な慣習が茂吉の心を強く打つた。

また、茂吉の関心は、古代ギリシャの詩人アナクレオントまでも向けられ、その死を羨んでいた。

むらさきの葡萄のたねはとほき世のアナクレオンの咽を塞ぎき

葡萄によつて窒息死したと伝説をふさわしく思う。

寒の夜はいまださきに漸は Winckelmann のうへにおちたり

右の歌は、アナクレオンの歌と無関係ではない。昭和十四年の作で、このワインケルマンは十八世紀のドイツのギリシャ美術家。ワインケルマン全集を借りてきた茂吉が、その美術書に夢中になるあまりに、本の上に鼻水を垂らしてしまつたとして、自分の粗相を隠さなかつ

た。このワインケルマンといい、またアナクレオンといい、茂吉が古代ギリシャの美術や詩に深く関心をもつてたことが知られる。戦時下における鬱陶しい苦悶をぬぐい去るものとして、あえて設定されたにちがいない。

ヴァチカノの鐘のひびきは現なるわれの臥處にしばらく聞くゆ

すでに昭和十四年に入る。「手帳四十五」には「三月十一日、ローマ、聖ペトロ寺院、ピオ十二世、羅馬法皇」というメモがある。その日を期待し、実際に実況放送を聴いて詠んだことが確実である。もとよりカトリック教徒ではないが、サンピエトロ聖堂の鐘に耳を傾ける。たんに好奇心によるものではないことが、その素直なる調べに滲む。

このように茂吉がドイツをはじめ「欧州」に拘泥した理由に挑んだのは、中野重治の『斎藤茂吉ノート』における「ノート十二 ヨーロッパと音」（初出「日本短歌」昭和十六年十一月）という論文であった。歌集『寒雲』が出た、その翌年に発表されたものであり、そこで重治は次のように言う。

恐らく茂吉において初めて、そして大規模にヨーロッパが全く媒体されて「日本人が抒情された」ことを指摘していた。こうした指摘は、その後も類例を見ない。すでに最初に引いたスバルタの歌（リュクルゴスの回帰たたかふる）の歌などを含む十数首をあげたうえで、この重治は「茂吉において、ヨーロッパが、いかに日本人茂吉の個に即して生きられたかが明瞭である」として、その独創性を強調してやまない。

茂吉が古代ギリシャの美術や詩に深く関心をもつてたことが知られる。戦時下における鬱陶しい苦悶をぬぐい去るものとして、あえて設定されたにちがいない。

他の人（注、晶子、白秋、善磨、赤彦の流れ）は、ヨーロッパ的なものを一たび取りあげてやがて捨てて去つた。たとへば、彼等には、ヨーロッパの文學を日本訳で読み、ヨーロッパの美術を写真複製

で味はつたやうなどころがあつた。茂吉には、それを原文で読み、現物について味はつたやうなところがあつた。前者はその雰囲気を受けた。後者はそれの実体を生きた。それによつて、ヨーロッパが克服されつづきたのである。（前掲書）

茂吉における写実がもつ発見や幻想、豊かな風土や土俗性、さらには多彩な自己検証などが見られるという、これまでの論調とは異なり、茂吉のなかに生きている欧州を見出してきた、そのことに注目したい。

さらに重治は「他流と戦つて『万葉』を尊敬し、万葉言葉を頑固にまもつて来た一人としての茂吉が、その日本風・野暮のなかに、却つて深く近代的・ヨーロッパ的を藏してゐた」とも言い換える。重治は作品の実例を引き得なかつたが、ここに採択したものを味読していただきたい。

すでに例証してきた作品が明らかな通り、第一次大戦の欧州における主潮が反映され、茂吉の作品は厭戦的なものとなつていた。ひたすら人間味に富んだ生き方が渴望されていて、『寒雲』が戦意高揚とは相反する、スケールの大きな旺盛な人間像が結実していたのである。

## 『赤光』の気になるところ

佐伯 裕子

斎藤茂吉の『赤光』について、長く気になつてゐる」とある。「死にたまふ母」など、故郷の父母兄弟への思いをうたう茂吉だが、義父の紀一を始めとする斎藤家の深部にとどく歌が少ない。遠慮があつたのだろうか。「狂人」を診察する悲しみや憤りを表してはいる。だが何故、精神病院を経営する斎藤家に潜む闇のようなもの、身近に見る新興都市型の生活への率直な感慨を表さなかつたのだろう。明治四十年に落成した当初の「精神病院」は、疑似西欧風の大建造物だつた。その異様な建造物が象徴するものは何だったのか。ことに何故、農村出身の自身の劣等感とパラレルに潜んでいたであろう、「幼妻」の微妙なコンプレックスに思い及ばなかつたか。私は氣になるのである。

かの岡に精神病院のたちたるは邪宗来より悲しかるらむ

『赤光』

寒ぞらに星あたりけりうらがなしわが狂院を

に立ち見つ

この『赤光』の二首は、遠巻きながら私の疑問に応えてくれる。「精神病院」や「狂院」という強い語を使つたのは、養家への違和感を強調するためと思われる。意図があつてのことだ。

一首目は、急速に発展拡大した病院事業の深部をえぐり出すものといえる。西欧の宮殿に模されて、どこか安直な大建造物が出来上がつたとき、土地の人らはどう感じただろうか。今まで精神医療は重要な医療

になつてゐるが、明治から大正にかけてはまだ混沌の中についた。しかも初めての大型「精神病院」である。土地の人には、異教が飛來したよりも、恐ろしく、異様な建物に見えたに違いない。それは悲しい光景だつたろう、とうたうのである。木下李太郎的な異国情緒が、なおさら濃密で不穏な空氣を醸している。自分の悲しみを超えて、土地の人々の視線を借りた批評のように読める。

では二首目はどうか。結婚前の茂吉は母屋と離れた棟を書斎にして住んでいた。星空のもとで「うらがなし」く、「狂院」との関わりを思つてゐるのである。一首目のような、精神病院を「土地の人の目」で見た鋭い歌ではない。茂吉らしく、しみじみと己れを愛しんでいるのである。

二首目のうたい方は、『赤光』の通奏低音となる、憂いや悲しみを伝えるものだ。実際、私は、『赤光』

たえまなく激ちの越ゆる石ありて生なきものをわ  
ればかなしむ

『白桃』

「生なきものをわれはかなしむ」というのである。普通の感覚とは異なるだろう。この「かなしむ」は「愛しむ」、愛しい思いに満ちた悲しみだ。細かく生なきものへのかなしい視線、それは茂吉の官能に触れているよ

うに読めるのである。

『赤光』で「精神病院」を大きく批評的にうたつたのは、一首目のみのように思われる。一首目はやがて、『白桃』に收められる時代批評の秀歌に繋がつていく。民族のエミグラチオはいにしへも国のかひをつひに越えにき



結婚前の斎藤輝子

のなかの、細かい砂や塵、埃などに悲しみを探る歌になつてゐるが、明治から大正にかけてはまだ混沌の中についた。しかも初めての大型「精神病院」である。土地の人には、異教が飛來したよりも、恐ろしく、異様な建物に見えたに違いない。それは悲しい光景だつたろう、とうたうのである。木下李太郎的な異国情緒が、なおさら濃密で不穏な空氣を醸している。自分の悲しみを超えて、土地の人々の視線を借りた批評のように読める。

電燈の球にたまりしほこり見ゆすなはち雪はなだ  
れ果てたり

細みづにがるる砂の片寄りに静まるほどのうれ  
ひなりけり  
春のかぜ吹きたるならむ目のもとの光のなかに塵  
うごく見ゆ

生のない細かいものの動きにしんと添わせた、沈んだ憂いや悲しみ。そのような歌の作りは、茂吉のどの歌集にも秀歌となつて散見する。例えは、

谷汲の苔よりいで砂ながすいまだかすかの水な  
りしかば

たえまなく激ちの越ゆる石ありて生なきものをわ  
ればかなしむ

『白桃』

「生なきものをわれはかなしむ」というのである。普通の感覚とは異なるだろう。この「かなしむ」は「愛しむ」、愛しい思いに満ちた悲しみだ。細かく生なきものへのかなしい視線、それは茂吉の官能に触れているよう

うに読めるのである。

『赤光』で「精神病院」を大きく批評的にうたつたのは、

一首目のみのように思われる。一首目はやがて、『白桃』

に收められる時代批評の秀歌に繋がつていく。

民族のエミグラチオはいにしへも国のかひをつひに

マルクス死後五十余年になれるまに幾度にも幾度になりて渡来したり

ヒツトラのことを聞きしき何か悲し前行したりし樂も悲しもヒンデンブルグ大統領逝去

茂吉にとって、斎藤家といふ急いでしらえの「西欧」は、アンバランスな時代を象徴する居心地悪い所だったのだらう。

※

明治十五年に、山形県上山市の農業に従事する守谷家の三男として生まれた茂吉。学術優秀な少年だったらしい。浅草で病院経営に成功した遠戚の斎藤紀一の養子になるために上京するが、養子とは名ばかりの書生のような居候となつた。その上、斎藤家に男子が誕生してしまつた。身の置き所のないまま入り婿となつてからは、自由奔放な「幼妻」てる子との齟齬に苦しんでいく。

農村の農家、守谷家出身の茂吉と、病院経営に上りつめた東京の斎藤家。いうならば稻作文化と新興都市文化。新旧の極端な文化が、一つの家に同居したようなものである。齟齬がないはずはなかつたであろう。藤岡武雄著『斎藤茂吉 生きた足あと』によると、養父紀一は「次女てる子を女子学習院に入学させ、またときどき園遊会を開いて各界の名氏を招待するなど、貴族趣味にあこがれ、彼が夢みた上流階級の生活に近づこうとした」とある。訛りのつよい地味な青年茂吉は、「田舎人」として養家人々に疎まれたに違いない。

だが一方で、急いで「上流階級」にのし上がるうとする家であった。茂吉はどう感じていたらう。そのような父をもつ少女はどうだつたのだろう。家柄を重んじる、当時のいわゆる華族学校「女子学習院」で、てる子の「家」はどう映つていただろう。茂吉とは別の劣等感が膨らんでいなかつたとはいえない。そのように考えると、貴族然とした学校に通わされたてる子のコンプレックスが思われてならない。てる子の反抗的な奔放さは、そこにも由来していたように私は思つてゐる。

さらに、結婚に寄せるてる子の証言は印象深い。茂吉との結婚の日が何日だつたか記憶にないのである。

さらに、昭和三十八年にインタビューされた女子学習院の親しい友人の証言も、いいのかな、と思うほど大らかで率直な発言だ。「てる子さんは卒業後も専修科に通つておられた。その頃、深い恋愛関係があつた話をおききした」（同書より）といふのである。

てる子は悪妻という評判だつたが、私には、てる子も、友の恋を公言する友人も、世知に長けていない女性のように思われる。世間的な計算がすっぽり抜けている、というのだろうか。外側から見ると、いかにも大胆不敵に見える自然さなのである。

をさな妻をとめとなりて幾百日もよひも最早眠りゐるらむ  
『赤光』

木のもとに梅はめば酸しをさな妻ひとにさにづらふ時たちにけり  
てる子は茂吉の目に、ひたすら「をさなき」女性としか映つていない。茂吉はどうして、身近にいる少女の抱える深部を見ようとしなかつたのか。

汝兄よ汝兄たまゝが鳴くといふゆゑに見に行きければ卵が鳴くも

この一首ほど、大胆で奔放な少女の性格を、愛らしく悲しく表した歌はない。だが、ひとたび、細やかな悲しみを添える茂吉の文脈に収ると、幼い妻の独自が絡めとられてしまう。てる子には、「瘋癲院」を批評した大胆な文体こそが相応しかつた。そのような面白い女性が、茂吉のすぐ側にいたのである。

■さえさ ゆうこ 歌人・「未来」



茂吉の養父斎藤紀一経営の帝国脳病院(青山病院)

\*戸籍名は「てる子」であるが、本人自身が「輝子」を多用した  
\*『赤光』の引用は初版による

## 藤の花ふさと畠

瓶にさす藤の花ふさみじかければたたみの上にと  
どかざりけり

正岡子規『竹乃里歌』

正岡子規の一首として誰もが語る一首であるが、「どうかない」ことが名歌たる要件と言われる」とが長く私の胸中にわだかまつて十分な鑑賞が成り立たずいた。

昨今の異常気象が日常的になつて、炎天の盛夏に街なかの往き返りに目にする国道わきのマンションの庭にある藤棚にも、七月から八月への狂い咲きが見られ、幾房かの花房が瑞々しく淡紫の花穂を下げて、白と紫の調和が見上げられる。私の視線より高く花が下がつてゐる。

そうだ子規の視線は花を上でも、横でもなく、やや下辺から見上げているのではないか。身動きできない子規の眼が最も届き易いように、花房は短めに瓶にさされていたのだ。短くしてくれてありがとう、おかげで藤の花の咲きかた、その咲きぶりの美しさを堪能したことだ。

たたみに届かないから、空間に見て観賞しているのである。文章によると、四月一十八日夕食後とあるので、外光のもとでなく、灯明かりなのであらうか、そこが実証的ではないのが気にかかるのであるが、花を飾るのは優しい妹さんがやつてくれたはず。長かつたものではたたみに届きすぎて余る丈の花では楽しめない、みじかくしてくれたところ遣いを感謝する思いで、自然のま

まの花の美しさを愉しんだ子規の心の豊かさを思い起<sup>こ</sup>している。健常者であつたら目にする」とのない角度からの観照が「みじかさ」というものの優雅な味わいに流れ、もののいのちを確かに存在として捉えるものであつて、新しい作品が生み出されたのであろう。

私の先々師窪田空穂いう「具象とは実際を描写するだけない、実際化。」があつて、藤の花と病床の人とが実際化する、ふわっとしたあたたかさに包まれた。

くれなゐの一尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに

くれないの一尺伸びたるやさしさの休止から、薔薇の芽の針のやわらかにでまたしらべに息が入り、ふる春雨へと一気に展開して、全体的にやわらかさから暖かさへと、読者の心持までをあたたかくつみこんでいる。

若松の芽だちの緑長き日を夕かたまけて熱いでにけり

『竹乃里歌』拾遺

若松の芽立ちのみどりの視覚で休止。長き日をと季節感の具象で休み。夕かたまけての時間経過から、熱いでにけり。は息つく間なく刻むこむようになだれこむ。名舞台に於ける人とのとの間断置かぬ張りつめた立回りの呼吸でその芸域の気高さを子規と読者が演じる。

茂吉に「自然・自己一元の生」がある。どこか一線で分かたれるものでない、ものの実在とは何かという命題に直接にふれる写実の描く眞実の姿ではなかろうか。

のど赤き玄鳥ふたつ屋梁にゐて足乳ねの母は死に  
たまふなり

初版『赤光』

臨終ちかい母を見守るさなかに、ふと目をやると屋梁にはのど赤いつばくろ二羽が居た。死のうとする母とつがいの二羽が新しい命を育てようとしている。だれが予定したわけではなく、現実に死の床の母の生命と、燕夫婦のごく自然な取り合させを作者は何という神仏の差配かと思わず居られない。最愛の母のいのちの今際と言う痛切な悲嘆の行き違う瞬間が斎藤茂吉という歌人の精神の頂点にあつた。その現実が現実通りに純粹に一首は残された。介在するものはないにもない実際の実際化が一首を形成しているのではないか。事実を客観的にありのまま、短歌と言う形式と声調が担うには、作者の自分と作品に対する強力な主觀力が永劫に貫かれていて揺らぎなく、一首と出会う万人が胸中の悲嘆を共有する。

をさなごは畠のうへに立ちて居りこの稚児は立ち  
そめにけり

『あらたま』

半田良平は大正十年一月新刊の『あらたま』二三二頁で一首と出会い。同五月付で「茂吉氏の一首」を書く。

「この歌は漫然と読む人には存外看過され易いものと思ふが、実にしつとりとした現実味をもつて居る歌だと考へて居る。」「この歌が主觀客觀融合のよい例証をなして居ると信ずるからである」「上の句は、幼児が

畠の上に立つて居るといふ現前の状態をありの儘に写生したものである。下の句は対する作者の驚異の情を表した。

さらに上下句の続き具合が實に自然。上の句を自分とは対立的に見る。下の句でその事象を自分の心持ちの中に融かし込み、活かし切っている。技巧的には三句切れで静から動への時間的休止を、自然に表している。この下の句が主觀の表白と言つことを知つてほしい。と結ぶ。

茂吉の長男・茂太独り立ちの一首。畠に立つたという。日本古来の畠は板の間でも土間でもなく、日本人にとって一番安全な什器である。子規は畠の上に。何千回の受け身をとつた私には懐かしい。茂太は最も安全な畠に立つたのだ。半田良平大正十三年刊『短歌新考』から引用したが、一冊は、良平の昭和十二年刊『短歌詞章』とともに私の歌を学ぶための常に手放せないバイブルである。

昭和三十八年に「国民文学」入会と共に多くの先輩達の教えはまず第一に近代的に評価の定まつた万葉集以降古今の名歌の暗唱。現代短歌は正岡子規、伊藤佐千夫、島木赤彦、斎藤茂吉、窪田空穂、松村英一等が挙げられた。在京同人の中で最も「アララギ」を勉強していると言われていた元東京試験所長という新免忠が、私が貨車連結手という仕事をしている日の殉職事故を

君が手をはなれて転りし合図灯錆びし軌条を照らしてゐたり

と詠んだのを、これが一番いい歌だ。事実だけを詠んで写実に徹している。その背後から同僚の死を悼む哀

しみのこころが訴えられている。事実だけをいかに詠えるかが作歌の使命だといわれて、歌の表現と言ふもの認識した。たしか二十歳前後だったと記憶している。あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命

なりけり

『あらたま』

教科書に出ていて心に刻み込まれた一首である。難しい用語を駆使し朗々たる声調にのせて詠う。なにか全く別世界にいた歌人のような気がして柿本人麻呂クラスのまるで無縁の人物のように思われていた。典型的なその格調に馴染めなかつたのが当たり前だが、舌頭のものとして愛唱するままに心に染みるものが必要ある。

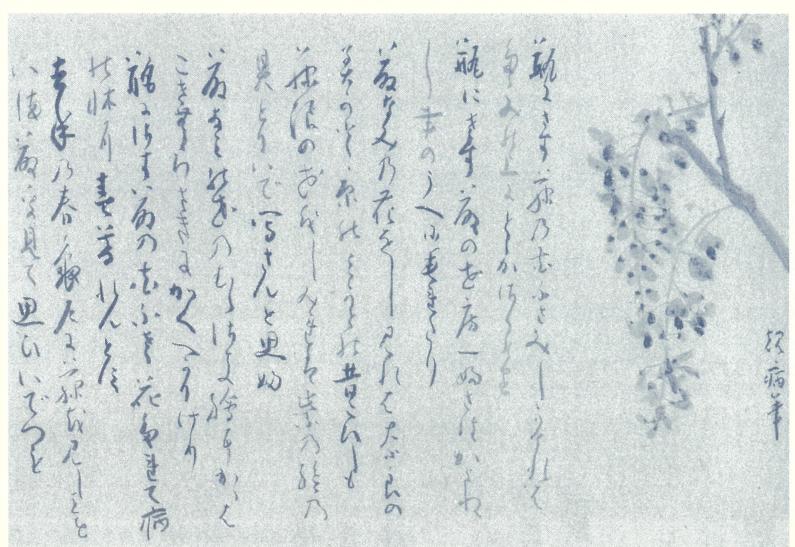
赤茄子の腐れてゐたるところより幾程もなき歩みなりけり  
家いでわれは來しとき渋谷川に卵のからがながれ居にけり  
『ともしび』

こうした作品によつて、どこか自分と近いところを見つめていた人だと分かるようになつて一段と親しみが涌いたのである。歌は内容だけでなく表現の力によつて命が定まるのである。「どこより幾程のなき」「われは來しとき」などが、「赤茄子」や「卵の殻」をいきいきと描く主觀のちからで、その内容を一変させて面白くする。

最上川の上空じやうくうにして残れるはいまだうつくしき虹の断片だんぺん  
『白き山』

昭和十九年の会の斎藤茂吉研究会が富樫榮太郎氏のお世話で初秋の大石田方面に訪れた折に歌碑文学にともなつて激しい雷雨がありバスより、実際に虹を見て移動したりしてちょうど、その虹が薄れてゆくのを見上げたのである。最上川の上空の雲のかがやきの切れ目に剥片のようないまだうつくしき虹の断片を目にすることが出来たのである。それは時がたつにつれて胸深く刻まれて懐かしい。「最上川の上空にして」で休止。「残れるは」で休止がある。「いまだうつくしき」感概の後、主役の「虹の断片」は本当に儂く薄れていったが、茂吉自身の命が投影された清らかな上空の断片であつた。何度も訪れた茂吉ふるさとで見た虹はこのときただ一度である。

■ みとも いきち 歌人・「国民文学」  
を見上げたのである。最上川の上空の雲のかがやきの切れ目に剥片のようないまだうつくしき虹の断片を目にすることが出来たのである。それは時がたつにつれて胸深く刻まれて懐かしい。「最上川の上空にして」で休止。「残れるは」で休止がある。「いまだうつくしき」感概の後、主役の「虹の断片」は本当に儂く薄れていったが、茂吉自身の命が投影された清らかな上空の断片であつた。何度も訪れた茂吉ふるさとで見た虹はこのときただ一度である。



正岡子規画譜 藤の花図及び連作歌七首(明治34年)

# 気軽に口遊みたい茂吉の歌

斎藤茂吉にはたくさんの歌がある。一万七千余首を数えるから、すべての歌を読むことはなかなか容易ではなく、まして記憶することは不可能である。しかし、読者めいめいの興味、関心、縁などに従つて五十首あるいは百首くらいの歌は折に触れて口遊むことは可能であり、楽しく且つ人生を豊かにすることができる。そんな作品例と身につく読み方について、私案ながら、何首か提示して置きたい。

好む歌を口遊むには①先ず自身が好きで魅かれている作品であり、声に出して読みたい歌であること。②一首は五七五七七の五句三十一音の定形のリズムで詠うたわれているから、どこで切るか、どこで呼吸するか、いわゆる「間」の取り方を考えて、自身の感じ取つたまま内容を幾ばくか強調し改まった朗読になる。③内容に従つて、どう自然に言葉に抑揚をつけたり、強弱（プロミネンス）を考えて声にしたい。

作者茂吉の作はどの歌も声調にこだわって、内容に合わせた調子になつていて、どう読むのが良いかは、読む人自身の感じた通りでよく、人を頼る必要はない。どの歌をも自身が主となつて判断し、誤っていたら、気付いた時に正せばよいことである。茂吉自身の自歌朗読は斎藤茂吉記念館で聞くことができるが、茂吉も自分流である。他の歌人もめいめい自分流であるから、読者の短歌朗読は、如何にその歌の内容をしつかり受

け止めるかであり、その上で自分流であることが許される。興味関心に従つて自由に朗読するから短歌が楽しいのであり、身につくものもある。

ここでは私の読み方の例（自分流）を示すことにし、私が常用している記号を使って参考に供したい。

△印は五句（五七五七七）を意識し、息をしない程度の間を取る記号。□印は句切れを生かし息つき（ブレス）を伴う間。網掛け部分は内容に従つて強調、抑揚等いわゆるプロミネンスをつけるところ。

右の記号により、以下茂吉作品の朗読例を示してみる。ごく気軽に朗読を試み、楽しみ、折に触れて口遊んでいただきたい。しかしあくまで自身の感じ取つたもの、読み取つたことを重視し、先に述べた通り主体的に自分流に声に出し楽しむことが大切である。

陸奥をふたわけざまに聳えたまふ藏王の山の雲の中に立つ  
『白桃』

**朗読** みちのくを△ふたわけざまにそびえたもう  
□さおうの山の雲のなかにたつ

那須には友人も多くある時期しばしば行つてゐる。一首は爽やかな夏山を詠つて、「いただきに夏の来むかふ」が何とも新鮮で、平明で親しい作である。短歌を口遊むのに適してもいようか。

最上川の上空にして残れるはいまだうつしき虹の断片  
△いまだうつしき虹の断片

**朗読** もがみがわの△じようくうにしてのこれるは  
『白き山』

虹の美をこれだけ的確に、時どころを添えて鮮やかに表現し得ている芸術作品は数少ないものではあるまいか。「断片」の美を言つて、全体の姿は読む者がゆたかに想像する。雄大な最上川の上空に更に大きく頭つ虹、断片となつてさえ「いまだうつくし」と言つて、これ以上虹を美しく描くことは不可能とさえ思われる。

をさな妻ニコロに持ちてあり経れば赤小蜻蛉の飛ぶもかなしき  
『赤光』

茂吉は生前、実弟の高橋四郎兵衛の求めに応じ、この歌碑は四郎兵衛が建立したものである。生前茂吉が許可した歌碑はこの一基のみである。

いただきに夏の来むかふ那須山にのぼり来りて大き谷見つ  
『石泉』

## 朗読

おさな妻△「こうに持ちてありければ△あ  
かこあきつの飛ぶもかなしき

明治三十八年茂吉二十三歳の七月、斎藤紀一は書生として育ててきた茂吉を次女輝子の婿養子として入籍した。紀一の病院の後継者として茂吉を迎えたのである。この時輝子は十歳くらいの少女であったから「をさな妻」であり、実際に結婚生活に入るのは十年ほど先になる。

こうろ妻まだら若く戸を開けて月は紅しといひ  
にけるかも

『あらたま』  
朗読 こうろ妻△まだら若く戸を開けて△月は  
あかしといひにけるかも

入籍し、いわゆる許婚者となるが輝子は幼く、二人が結婚生活に入るのは九年後の大正三年四月で、輝子は二十歳になり、茂吉は三十一歳であった。「をさなづま」から「こうろ妻」になったのである。茂吉の青春時代の言語感覚は百年過ぎた今日でも新鮮に響く。「をさな妻」にしろ「こうろ妻」にしろ若い茂吉の造語で、瑞々しい。

灰燼の中より吾もフエニキスとなりてし飛びむ小さ  
けれども

『小園』  
朗読 かいじんの中より吾もフエニキスと△なりてし  
飛ばん小さけれども

太平洋戦争の終盤、防衛能力を失ったわが国は東京をはじめ主な都市が米軍の空爆にさらされ、壊滅状態になつた。遂には広島長崎に原子爆弾を投下され、多くの人命も家財も失い、原爆症に苦しむ負傷者も

多く輩出した。まさに灰燼となり、わが国は敗戦となり米軍の占領下におかれた。斎藤茂吉は敗戦の四か月前から郷里上山にて疎開生活を送っていたが、敗戦後は自ら立ち上がりとしてこの歌を作っている。フエニキスは今日の表記ではフエニックスでエジプト神話の不死鳥である。こうして戦後も茂吉はたくましく生き、多くの歌人を激励した。

目のまへの売犬の小さきものどもよ生長のちは賢くなれよ  
『つきかげ』  
朗読 目のまへの△売犬の小さきものどもよ□せい  
ちようののちはかしこくなれよ  
催事の夜の露店でガス灯の下などに身を寄せ合つて売  
られている子犬ら。それを見ての茂吉の詠嘆。心の底  
から思わず湧いて出た茂吉の声である。さながら聖者の声と言つてよいであろう。

みづからの落度などとはおもふなよわが細胞は  
刻々死するを

『つきかげ』  
朗読 みづからの△落度などとはおもうなよ□わ  
が細胞はごく死するを

人は誰でも必ず老を迎える。体のいたるところに不  
自由をきたし、殊に記憶力とか、会話力などは著し  
く後退し、日常生活や人間関係の円滑を欠くことも  
少くない。しかしそれは歳と共に細胞が刻々死んで  
ゆくためで、個々人の落度ではないと医師でもあった  
茂吉は詠う。随分ありがたく、激励されるのである  
まいか。

暁の薄明に死をおもふことあり除外例なき死とい

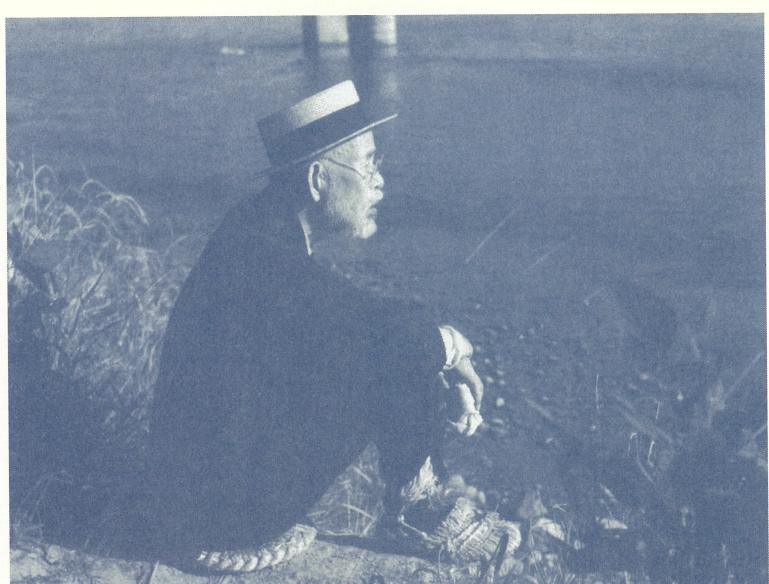
「つきかげ」  
朗読 暁の薄明に死をおもふこと△あり□じよが

いれいなき△死といへるもの

人の死は除外例がなく、誰にも必ず来る。古代人はミイラにして復活を願つたが、誰一人甦つた者はいない。

眞実の詠嘆である。誰にも必ず来る死、いよいよの時、こんな歌が口遊めたら、あるいは心が安らぐであろうか。

■秋葉 四郎（あきば しろう）館長・歌人



大石田の最上川の畔にて（撮影：佐々木勇 昭和 22 年）

## 定例歌会 第19・20回

茂吉記念館だより 24号

令和三年度講座事業として定例歌会（第十九回）六月二十八日、第二十回（十一月十五日）を、歴史や居住地に限定しない超結社の歌会として計画した。

しかし、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、一堂に会する集会的な歌会を取りやめて、十九回・二十回ともに紙上歌会として開催した。以下各回の詳細は次の通り。

### ■第19回（紙上歌会）

六月に開催予定の第十九回は、紙上歌会として六月上旬から八月上旬にかけて行つた。

□紙上歌会の作品募集（六月十日～六月二十五日）  
○選歌と歌評のため歌会作品集（全投稿歌を無記名一覧化）を参加者に郵送（七月一日）

□参加者は選歌と「最も印象に残った歌（一首）」に対する歌評を執筆し記念館に返送（七月二十日）

□氏名入り作品一覧、選歌集計結果と各参加者の「最も印象に残った歌（一首）」に対する歌評、講師（秋葉四郎）の全歌評を掲載した「第十九回定例歌会【紙上歌会】作品集」を発行（八月十日）  
□「第十九回定例歌会【紙上歌会】作品集」を参加者に郵送

以下高得点作品と講師選作品紹介（敬称略）

\*互選一位／夏服とマスクの白さ際立たせ風青き朝生徒らゆく

山川 ひろみ

\*互選二位／桜盛り晴れ渡りたる日の入りの藏王連山紫に映ゆ

武田 清一郎

\*互選三位／コロナ禍に茂吉記念館静もりて茂吉の像に桜花散る

大沼 久子

\*互選四位／わが折りし百体の難流れゆく疫病退散の祈りを込めて

\*互選五位（同点）／われの乗る車の音を聞き分けで餌求む豚ら一斉に鳴く

\*互選五位（同点）／執拗に我は厨をみがきをり夫と争ひいらだちをれば

植松 和子

\*互選五位（同点）／今ひとりと電話かけこし母の思ひ今にしてしむ老いの寂しさ

大木 喜久子

\*互選五位（同点）／山形の講演にて種いいただきし紅花が咲く黄のさはやかに

秋葉 四郎

○秋葉四郎選／われの乗る車の音を聞き分けて餌求む豚ら一斉に鳴く

蜂谷 弘

### ■第20回（紙上歌会）

十一月に開催予定の第二十回は、紙上歌会として十月中旬から同年十二月下旬にかけて行つた。

□紙上歌会の作品募集（十月十五日～十一月一日）  
○選歌と歌評のため歌会作品集（全投稿歌を無記名一覧化）を参加者に郵送

□参加者は選歌と「最も印象に残った歌（一首）」に対する歌評を執筆し記念館に返送（十一月十五日）

□氏名入り作品一覧、選歌集計結果と各参加者の「最も印象に残った歌（一首）」に対する歌評、講師（秋葉四郎）の全歌評を掲載した「第二十回定例歌会【紙上歌会】作品集」を発行（八月十日）  
□「第二十回定例歌会【紙上歌会】作品集」を参加者に郵送

以下高得点作品と講師選作品紹介（敬称略）

\*互選一位／夏服とマスクの白さ際立たせ風青き朝生徒らゆく

山川 ひろみ  
予定

（十一月下旬）

毒作業実施

## 新型コロナウイルス感染拡大に伴う事業規模 伴う対応について

### ■新型コロナウイルス感染拡大に伴う事業規模の縮小

□第四十七回斎藤茂吉記念全国大会（五月十六日）は当日午前中に関係者参列による墓前行事のみ行い、午後の記念講演等は中止した。

### ■感染拡大防止策（前年度対策を継続）

□入館受付に飛沫対策のアクリルパネルの設置

□入館料と物販の金銭授受はトレイ上で行う

□入館希望者に対する非接触体温計での検温を実施（三十七度以上の場合は、入館をご遠慮ください）

□マスク着用と手のひら消毒の協力依頼（消毒用アルコール等を設置し、マスク不所持の場合は必要数を提供）

□入館者に対する氏名・住所等を含む連絡票の提出協力依頼（感染者発覚後の通知利用を目的とし、一定期間保存の後に破棄）

□映像展示室内の座席四十席を、半数の二十席に削減。※感染者の減少傾向を鑑み、十一月より座席数を五席増加し、間隔を空けつつ二十五席とした。

□受付、館内ベンチ、キッズサロン、集会室内等にソーシャルディスタンスの掲示

□集会室内設置「茂吉ライブラリー」検索用パソコン二台のうち一台を使用停止

□ドアノブ、連絡票記入台、記入用鉛筆等の適宜消

## 収蔵資料から ・斎藤茂吉の日記帳・

令和2年度の寄贈資料として、大正14年（昭和27年）の約30年にわたる斎藤茂吉の日記帳全28冊が遺族から寄贈された。その内容は旧全集（全56巻）、新全集（全36巻）とともに収載されたが、原本の所在はこれまで不明であった。本稿では日記帳と表記に関して報告し、また調査過程で筆者が注目した茂吉の臣民としての自負心について紹介したい。

全冊は新書判程度（最大A5判程）の大きさで、茶・黒・紺のインクや黒・赤の鉛筆等が使用されている。表記について、茂吉は予め印刷された野線に合わせ主にカタカナと漢字を用いているが、28冊中23冊が横野、5冊が縦野である。縦野は日記No.17～20・22（昭和11～13・15～17年）の、月日や天候の記入欄が予め印字された日記用ノート5冊であるのに対し、横野23冊のはじめが通常のノートである。そのノートには、事前に数日先まで月日を記入しその文量を一定にしていたが、院長時代等の多忙な時期は書くことが出来ず、月日の記入にとどまつて本文の空白も目立つ。昭和初期には日記拾得者に対する返送依頼が表紙裏に記載されているもの（No.12・13・昭和6～7年）や、精神鑑定で裁判出席中に日記を書いた日（No.8・昭和3年5月7日）もあり、外出先に日記を携帯することもあつた。類似する資料として常に携帯し歌稿やメモ等を記していた手帳60余冊も收藏しているが、それらは約三分の一ずつ横野、縦野、無野で若干数の方眼のものも含まれる。茂吉は歌稿を書きつける際には野線をあまり気にせず、ひらがなと漢字の縦書きで表記した。手帳を含む直筆資料の短歌に関する表記のほぼ全てがひらがなと漢字の縦書きである一方、日記はカタカナと漢字が用いられ大半が横書きである。これは書く内容や種類によってノートや表記方法を使い分ける傾

向にあつたということだろう。手帳には短歌に関するメモをひらがなと漢字で縦書きし日記には日々の出来事をカタカナと漢字で横書きにしてまとめる、というのが通例であつたようだが、それらが混在する例外がある。「天皇御即位式」と題された昭和3年11月10日の日記である。

この日「午後三時」、「天皇陛下万歳」ヲ三唱ス、「歌（大宴会）考フ」と記され、翌日「大宴会ノ歌一ツ作ル」とも続く。この時期の手帳は現状存在せず、昭和天皇即位を祝ぐ歌稿群がたまたま日記帳に記されたが、「大宴会」という奇妙な名称の歌稿群が「大嘗祭十一月十四日（東京日日新聞）」と題され、後に歌集『ともしび』に収められる。正しくは大嘗祭と表記・認識されるべきだったが、悠紀と主基、東西の斎田について言及しているにも関わらず、一度も誤記していることから信じ難いことに茂吉は大嘗祭を大宴会と誤認していた可能性がある。

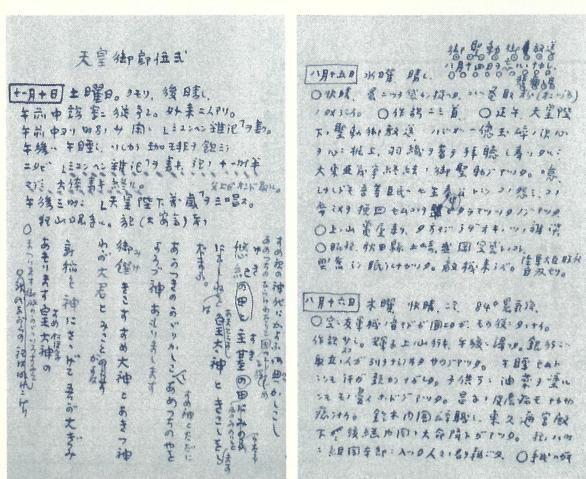
これは想像の域を出ないが、穀物と天皇にまつわる茂吉の素朴な体験が遠因になつているように思われる。同年2月に発表した隨筆「かてもの」は飢饉に備える穀物と調理法、祖父から聞いた天保飢饉について書いているが、「白い色をした握飯の方を小供ごころにも尊敬」し、「高等小学校に通ふころには、町の児童は土族の子でも商家の子でも、全く真白な飯の弁当を持つて来て居た。それを先づ僕は驚いて視なければならなかつた」とある。村出身の農民・茂吉が、（土族）（商家）の身分や（町）といった場所で口にするものが異なると気が付いた体験とほぼ同時期、明治23年に教育勅語が発布され翌年には明治天皇の御真影が自身の通う尋常小学校にも下付される。そして、教育勅語の「忠良ノ臣民」という教えが長きにわたり茂吉に色濃く残つていてことを、憲兵の家宅捜索を受けた昭和11年4月12日の日記は示している。

この事件は長男・茂太の所有する飛行機写真が原因で、早朝突如やつて来た憲兵が「引出マデアケテ私信

マデ細々ト読んだのであるが、茂吉は「コレガ陛下ノ忠良ナル臣民ニ対スル仕打チデアルカ」（傍点ママ）とも述べる。日中戦争以前の出来事といふことも然る事ながら、その憤慨が「忠良ナル臣民」という自負心によつて生じたことに注目したい。大日本帝国憲法に明記されたように、ときの天皇は「神聖」な存在であった。そして茂吉の臣民たる自負心と昭和天皇への信奉がこの日記を再評価するうえで重要な点だと筆者は考へおり、これは戦争詠を検討する際の一助にもなり得るだろう。昭和20年8月15日には、「大東亜戦争終結ノ御聖勅デアツタ。噫、シカレドモ吾等臣民ハ七生奉公トシテコノ怨ミ、コノ辱シメヲ挽回セムコトヲ誓ヒ」とも記している。「吾等」という一人称複数の認識や、その激情も平時と大差ない筆運びで書き記す茂吉の気質、もしくはこの書記行為の激情と気質への影響等、様々な示唆を与える意義深いものといえるだろう。

日記帳は調査のうえ、今後常設展示の予定である。

（文=五十嵐善隆）



斎藤茂吉の日記（左から昭和3年11月10日／同20年8月15・16日）

## 短信（掲示板）

### ◆講座事業 定例歌会（第19、20回）

記念館の周知・誘客と短歌の普及と実作の向上、さらに歌壇の発展等を目的とした超結社の歌会形式で、継続事業として「回計画／第十九回／新型コロナウイルスの影響により紙上歌会として令和三年六月七日（月）から同年八月十日（火）にかけて開催し、歌評を掲載した作品集を発行・投稿歌数五十六首／第二十回／同様に紙上歌会として令和三年十月十五日（金）から同年十一月下旬にかけて開催（歌評を掲載する作品集を発行予定・投稿歌数六十一首）※詳細は本紙ナビゲーションに掲載

藤茂吉との関わりと作品創作の経緯などを紹介／会期 II 令和三年九月十九日（日）から令和四年三月三十日（木）

### ふるさと納税

上山市ふるさと納税制度のご活用による控除が受けられます。また、斎藤茂吉記念館提供によるオリジナルグッズの返礼品があります。

上山市ふるさと納税

検索

### ◆特別展

### ◇「日記と歌で辿る斎藤茂吉の素顔」《初公開！》

新しく収蔵した斎藤茂吉の日記帳全28冊を中心とした内容を介して、生活の様子や歌が生まれるきっかけとなる日々的心情などを紹介／会期 II 令和三年四月二十九日（木／祝）から同年八月三十一日（火）／一般公開に伴う事前公表（記者発表）／同年四月二十三日（金）（斎藤茂吉記念館内集会室にて）

### ◆「新収蔵資料展」

近年寄贈を受けた新資料から、斎藤茂吉の親族の所蔵品とアララギ歌人の旧蔵資料などを中心に、斎

### 「友の会」ご入会・「活動支援募金」のご案内

#### ●友の会

友の会会費は、当財団が実施する公益目的事業全般の充実等に活用します。

◎賛助・維持会員（対象：個人・法人・団体）

年会費 1口 10,000円（会員証で10名まで無料入館）

◎一般会員（対象：個人）

○藏王会員 年会費 1口 5,000円（会員証で5名まで無料入館）

○最上川会員 年会費 1口 3,000円（会員証で3名まで無料入館）

○学生会員 年会費 1口 1,000円（会員証で本人のみ無料入館）

※友の会は入会日より1年間有効です。

#### ●活動支援募金

活動支援募金に対する寄付金は資料の修復、複製資料の製作や記念館の設備更新等費用の一部として活用します。

○法人・団体等 1口 10,000円  
○個人 1口 5,000円

※「友の会・活動支援募金」とも、何口でも結構です。

※ご入会・ご寄付ご希望の方は当館までお問い合わせください。

### ◆広報・教育普及活動等

### ◆オンラインツアー（有料特別配信）について

#### 動画配信サイト「Vimeo（バイメオ）」にて秋葉館長の解説と一緒にオンラインで巡る約五十分間の動画

「秋葉四郎館長が語る斎藤茂吉ものがたり その魅

力、その偉大さ」の有料特別配信を開始／配信期間

II 令和三年八月一日～令和四年八月一日／視聴料

II 六〇〇円（税込）※一度の購入で期間中何度も視聴可能

### ◆東北芸術工科大学への展示協力

東北芸術工科大学日本画コース三年企画展示「街〈出よう〉における「仰げ！寫生道」短歌と日本画 SPECIAL FUSION」の展示会場として斎藤茂吉記

念館内ラウンジを貸出、他周知協力／会期 I 令和三年十月十九日（火）から同年十月二十六日（火）

### ◆キヤツシユレス決裁について

入館料のキヤツシユレス決裁（Pay Pay）運用開始／期日 II 令和三年六月一日（火）から

### ◆斎藤茂吉記念館評議員の選任

公益財団法人斎藤茂吉記念館評議員会が令和三年六月二十二日（火）、十月二十九日（金）にそれぞれ上山市役所で開かれ、役員の補欠選任が行われた。

六月は、大沢芳朋氏、佐竹瑞夫氏の退任に伴う補欠選任が行われ、長澤長右衛門氏、山川庸久氏を新任した。

十月は、古山茂満氏の退任に伴う補欠選任が行われ、横戸隆氏を新任した。

任期は前任者の残任期間で、令和六年六月までとなる。

### ◆編集後記

本紙二十四号のため、篠弘・佐伯裕子・御供平信の三氏より玉稿を頂戴しました。諸氏のご協力に厚く御礼申しあげます。

昨年から続く新型コロナウイルスの感染拡大の影響を受け、本年度も行事の開催中止や縮小、感染症対策の実施なども加わり、厳しい運営状況が続いている。一方で茂吉研究

の向上につながるきわめて重要な資料と作品の寄贈、寄託がありました。これは茂吉の遺族・親族をはじめとする関係各位のご厚意によるもので、大変有難く存じます。

（編集担当 II 五十嵐）

#### ◆利用案内

○開館時間 9:00～17:00（入館受付 16:45まで）

○休館日 每週水曜日（祝日・休日の場合は翌日）

○入館料 7月第2週の7日間・12月28日～翌年1月3日

一般：大人 600円・学生 300円・小人 100円

団体：大人 500円・学生 250円・小人 50円

※学生：高・大学生 小人：小・中学生

※団体 10名様以上 ※障がい者割引（団体料金適用）

△音声ガイド 300円（英語版有）

#### ◆交通案内

△お車でお越しの方（※無料駐車場有：普通車70台／大型車5台）

・東北中央自動車道かみのやま温泉ICから市内方面20分

△電車でお越しの方

・JR 奥羽本線「かみのやま温泉駅」からタクシー 10分

・JR 奥羽本線「茂吉記念館前駅」下車徒歩 3分